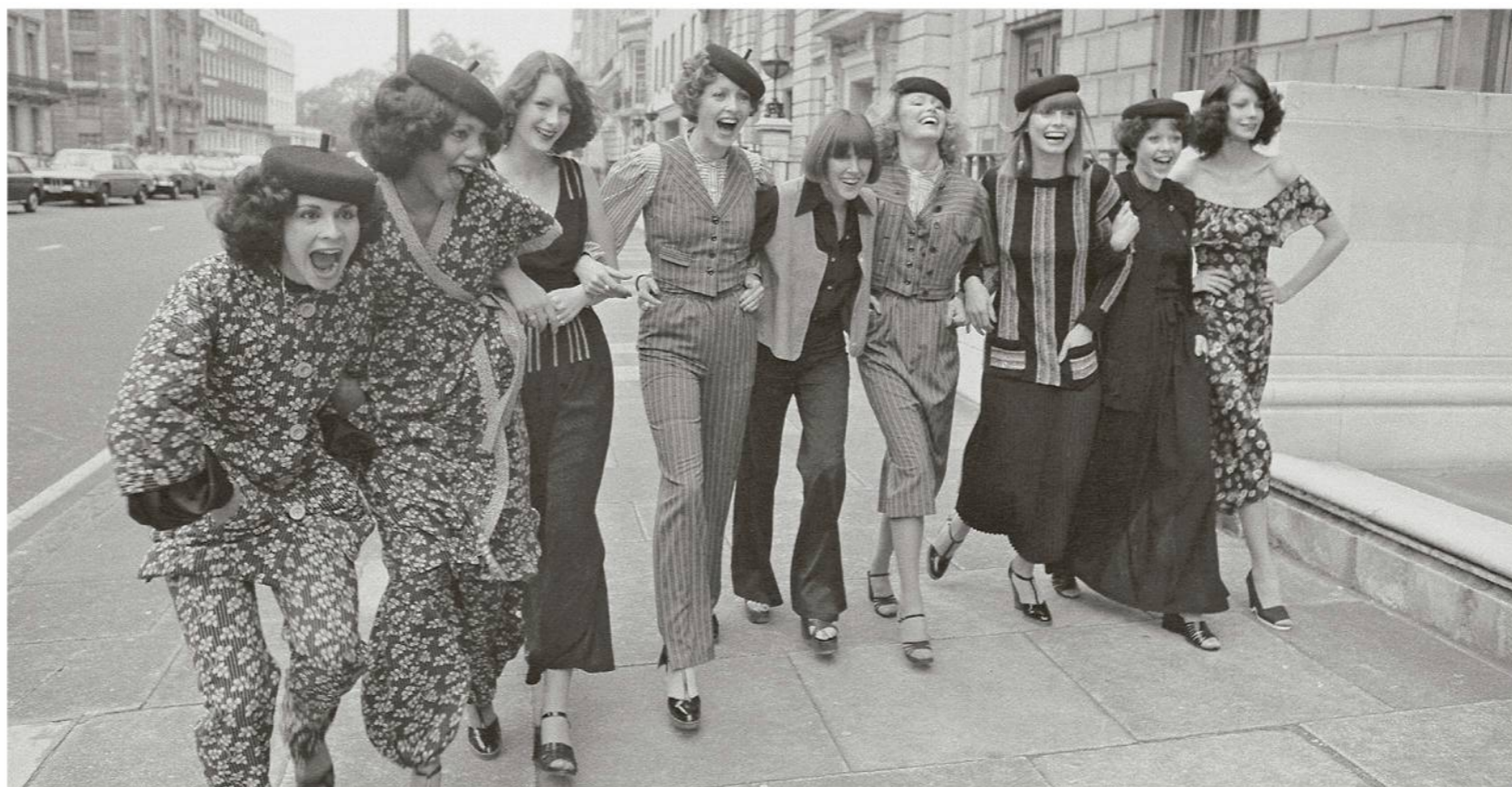




1967年、生地の保管部屋にて。すべての製品の細部にいたるまでマリーが厳しく目を通していた



エリザベス女王よりOBEを受勲。夫のアレキサンダー(左)、友人のアーチーと、バッキンガム宮殿に自らデザインしたミニドレスで行った



1975年、秋冬コレクションのプレビュー。マリー・クワント(中央)はファッションだけでなく、メーク、インテリアなどライフスタイル全般をデザインした

今では見慣れているものが、かつてはタブーであったことは少なくない。女性の膝もそのひとつ。教師の両親の下に生まれ、ゴールドスミス・カレッジで美術を学んだマリー・クワントが1955年、25歳でロンドンのキングス・ロードにブティック「バザー」を開いた時、膝が丸見えのドレスを作って販売した。ストリートからヒントを得たミニスカートに、保守層は眉をひそめた。マリーによる因習打破は続く。紳士服に着想を得たジェンダーの境界を揺るがすパンツスタイル、奇抜で大胆なボーズのマネキンやモデル、ロブスターなど唐突なオブジェのある前衛的なウインドウ。「バザー」から発信される斬新なカルチャーは、同世代を熱狂させながら時代にうねりを起こした。タイプストの女の子も、伯爵夫人も競って「バザー」の服を手取る。社会階級が厳として存在した当時の英国では画期的だった。それまで「ファッション」は上流階級のもので、その階級の女性を顧客とする主に男性デザイナーが流行を生む主導権を握っていた。この流れをマリーは逆流させ、ストリート発ファッションを上流階級に模倣させた。パリに替わる流行の発信地として、ロンドンの存在感を高めた。

イートルズを筆頭とするUKバンドが世界を席巻し、マリーは陽気で反体制的な新しいカルチャーの顔になった。66年、エリザベス女王より大英帝国勲章(OBE)を受勲する。デイジーマークを商標登録したのもこの年だ。スカート丈を変えたらタイツも作る必要があるし、ヘアもメイクも変えたくなる。スプリーで固めるヘアを時代遅れにし、ヴィダル・サスーンと組み、洗って乾かせば決まるヘアを流行させる。泳いでも落ちないウォータプルーフマスカラを送り出す。身支度が楽なスタイルは女性を活動的にした。日本に与えた影響も大きい。ミニスカートのアイコン、ツイギーが来日した67年、女性たちは百貨店、美容院に走る。タイツや帽子、靴も含めてトータルルクを買い替えたことが、景気の底上げにつながった。10月18日は「ミニスカートの日」という記念日になった。現在、ブランドの化粧品やファッショングッズを扱うのは日本の会社、株式会社マリークワント コスメチックスだ。前身の会社が91年に本国のマリークワント社の株式を取得して経営に参加し、93年には世界における化粧品の製造・販売の権利を取得した。

振り返れば、マリーは女性の外見だけでなく、社会に向き合う態度や行動、階級意識、街の風景までがらりと変えた。女性解放云々といった宣言を一言も発せず、闘争もせず、ただ、機嫌よく自分らしさを貫いたビジネスを通してファッションの民主化をもたらした。結果として社会に変化をもたらした。扇動も暴動もない、ファッションによる鮮やかな革命を起こしたのだ。

さて、もう40年近く前の話になるが、英国文化を学んでいた一学徒は、社会



1966年にマリーが発売した化粧品は今も世界中で人気がある



ヘアもメイクも社会も変えた

革命家マリーについての卒論を書くことにした。教授陣は「ファッション、ましてやミニスカートなんていう軽薄なテーマはアカデミズムにそぐわない」と反対した。反体制こそクールなのだと言する学生は反対を押しつけて書くと言

資料も満足にそろわない。仕方なくロンドンのマリー・クワントに資料を依頼する手紙を書いた。

1カ月後、航空便で会社のマーケティング資料や展覧会カタログなどがどっさり届いた。おかげでなんとか無事に論文を書いて卒業した学生は、その後、不思議な運命の導きで「服飾史家」という肩書きで、ファッション史関連の本や記事を書くことになる。2022年秋、ヴィクトリア&アルバート博物館の世界巡回展「マリー・クワント展」で展覧会と図録の翻訳監修をする機会に巡り合わせ、恩返しできた。

「常識」に違和感を覚えたらずやすとは従わず、さっさと自分が解放されて、自分に合う文脈を創りあげ、存分に自分らしさを発揮し、勤勉に働く。この主体的な倫理観を楽しく貫いて変革をもたらしたかっこいい女性だった。4月13日、享年93歳。ありがとうマリー、ご冥福を祈ります。

服飾史家 中野香織

写真はGetty、化粧品はマリークワント コスメチックス提供



「洗って乾かせばそのまま出かける」ヘアは女性の活発な活動を後押しした

ヴィダル・サスーン(左)による